説 教 「裁くな」

(詩編 143 編 1-6 節 マタイによる福音書 7 章 1-5 節)

2021 年 7 月 4 日

大串　肇　牧師

「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである」(マタイ 7:1)。

イエスのお語りになられた「山上の説教」の中でも最も有名な聖句の一つです。この「裁く」という言葉は一般的な意味で「裁く」「判断する」の他、「非難する」「法廷に告発する」という意味をもあります。しかしここでは裁判や法廷の事について問題にしているようには思えません。わたしたちの日常生活で交わされている非難や陰口あるいは悪口等、そういう日常のごくありふれた生活の問題であると同時に、とりわけここでは「兄弟」と書かれていますからイエスの弟子たち同士、クリスチャン同士の事柄が扱われていると考えられます。場合によっては深刻な人間関係のこじれに発展し、共同体の交わりが壊れてしまう、そういう危機を避けるために互いに裁き合うことがないように勧められています。この「裁くな」という教えを拡大して、道徳や倫理観を捨てて、不正や悪に目をつぶっていい、見逃していいと言っているわけではありません。わたしたちは信仰者であるならば、神の国が近づいていることを知っています。つまり、最後の審判です。神の国が到来しようとしている時に、わたしたちが他人を非難し合うようなことは終わらせねばならにと説いているのです。このような観点から、1 節はこう言い換えることが出来るでしょう。「裁いてはならない。最後の審判の時、あなたが神によって裁かれないために」。

「あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる」(2 節)。

2 節は 1 節の説明です。「裁くな」という教えの理由です。「自分の量る秤で量り与えられる」というのは当時のユダヤの格言であったようです。「尺をもって尺に報いられる」。日常の商取引にも用いられた記録があります。また、これは法の世界でも、また最後の審判が語られる時にも用いられた言い回しです。わたしたちが厳しい自分の尺度で他人を裁いているならば、最後の審判の時、わたしたちも同じ厳しい尺度で裁かれるのです。つまり、相手の欠点や過

ちをすることは実は誰でもできるのですが、わたしたち誰もが神の前にあって負い目があることに気づかないでいる。そこに裁き合いが起こるのです。実はその無知こそが最も深い罪なのです。そのことについて更に語っているのが 3-5 節です。

> 「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。兄弟に向かって、『あなたの目からおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる」。

第 2 の教えは大きなものと小さなものを対比する比較や比喩を用いて語られています。他人の罪や咎はあら捜しるのに、家の建築に用いられるような梁、丸太のような罪が自分の目に突き刺さっているのに気づかない滑稽さが浮き彫りにされています。ファリサイ派と呼ばれていたユダヤ教の指導者たちが罪深い女性や取税人を鋭くとがめていたことを思い起こします。厳しい基準を自分の当てはめるのではなく、他人に当てはめ、他人を責めるのは「偽善」であるとイエスははっきりと言われています。自分には甘く、人には厳しい。そういう自己中心的な生き方、自分の目に丸太が突き刺さっていることに気づかない愚かさが明らかにされています。誰でも他人のことを正しく判断できるはずがないのです。わたしたちはそういう意味では誰も完璧な人はいません。神の御前にあって誰もが「負い目」、弱さを持っていると言えるのではないでしょうか。その時、わたしたちは主の祈りを思い起こします。

> 「わたしたちの負い目を赦してください、／わたしたちも自分に負い目のある人を／赦しましたように」(マタ 6:12) 。

神はその憐みのゆえに、御子イエスをお遣わしになり、十字架の犠牲によってわたしたちの罪を赦してくださいました。この神の愛のゆえにわたしたちは互いに差別や偏見あるいは敵意や憎悪から自由になることが出来るのです。他者の欠点を非難するのではなく、先ず、わたしたちの罪を神がお赦し下さるようにお祈りしましょう。そしてわたしたちが互いに赦し合うことが出来るようにご一緒に願い求めてまいりましょう。お祈りいたします。